匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅵ

平成６年３月

島根県匹見町教育委員会

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅵ

平成６年３月

島根県匹見町教育委員会

序

本書は，平成５年度国庫補助事業として，道川地域圃場整備事業に先立って実施した町内遺跡詳細分布調査報告書であります。右報告のとおり，道川地域におきましても遺跡が散在していることが判り，それは当然といえば当然でありますが，一驚するばかりであります。

殊に前田中遺跡では，配石（集石）と思われる遺構とともに遺物が出土しており，これらを文化遺産とし捉えて保護，若しくは資料収集に力を注いでいかなければなりません。また，ダヤ前遺跡では縄文早期とする遺物が出土し，これまた貴重な発見であり，対応していかなければならないと考えております。ただ，他の２地点では遺跡である，という根拠性は乏しかったようではありますが，今後ともこうした調査を逐次進めながら，当町における埋蔵文化財に対しての意識高揚を計っていかなければならないと思います。それは強いて言えば様々な形で町民の量となり，財産になっていくものと固く信じて疑いません。

終わりに，今回の発掘調査にあたり，絶大なるご支援とご協力を賜りました土地所有者，あるいは圃場整備役員の方々に厚くお礼を申し上げるとともに，発掘指導者の先生に感謝いたします。また発掘調査に携わった皆さん，誠にありがとうございました。

平成６年３月15日

西見町教育委員会

教育長　斉　藤　惟　人

例　　言

1．本書は，平成５年度国庫補助事業として，匹見町教育委員会が実施した町内遺跡詳細分布調査の報告書である。

2．調査は，島根県教育委員会文化課の指導と協力によって，つぎのような体制で実施した。

調査指導	島根県教育委員会文化課	
	島根大学法文学部教授	田中義昭
	山口大学人文学部助教授	中村友博
事務局	匹見町教育委員会教育長	斉藤惟人
	〃　次長	渡辺　隆
	〃　派遣主事	安野光城
調査員	匹見教育委員会文化財保護専門員	渡辺友千代
調査補助員	竹木　誠	
調査参加者	栗田　定　森脇雅夫　渡辺　照　渡辺　勉	
	長谷川時子　山崎リマヨ　西田キヌエ　溝田　久子	
	青木スミ江　大谷孝子　清寺智子	

3．調査に際しては，土地所有者または圃場整備役員の方々をはじめ，地元のみなさんに終始多大な協力，ご援助をいただきました。ここに感謝の意を表したい。

4．本書の編集にあたっては，資料の整理または掲載図面等で，長谷川寿美枝，森本純子氏の手を煩わして成ったことに対して，感謝を表したい。なお編集は渡辺友千代が行ったものである。

目　　次

第1部　地域概況と調査要領 …… 1

第1章　地域概況 …… 1

第1節　位置と地形 …… 1

第2節　歴史的環境 …… 2

第2章　調査の概略 …… 4

第1節　調査に至る経緯と経過 …… 4

第2節　調査にあたって …… 4

第2部　各調査地点の調査概況 …… 5

第1章　前田中遺跡 …… 5

第1節　地形的立地 …… 5

第2節　調査の概要 …… 5

第3節　出土遺物 …… 9

第2章　ダヤ前遺跡 …… 13

第1節　地形的立地 …… 13

第2節　調査の概要 …… 13

第3節　出土遺物 …… 15

第3章　フケ上地点 …… 18

第1節　地形的立地 …… 18

第2節　調査の概要 …… 18

第3節　結　　句 …… 21

第4章　半兵衛屋敷地点 …… 22

第1節　地形的立地 …… 22

第2節　調査の概要 …… 22

第3節　結　　句 …… 25

挿　図　目　次

第1図　遺跡位置図(Ⅰ) …… 1
第2図　遺跡位置図(Ⅱ) …… 3
第3図　遺跡配置図(Ⅰ) …… 6
第4図　土　層　図(Ⅰ) …… 8
第5図　遺物投影図(Ⅰ) …… 10
第6図　遺物実測図(Ⅰ) …… 12
第7図　遺跡配置図 …… 14
第8図　土　層　図(Ⅱ) …… 15
第9図　遺物投影図(Ⅱ) …… 16
第10図　遺物実測図(Ⅱ) …… 17
第11図　遺跡配置図 …… 19～20
第12図　土　層　図(Ⅲ) …… 21
第13図　遺跡配置図 …… 23～24
第14図　土層・遺構図 …… 25

図　版　目　次

図版1　下道川地区の俯瞰
図版2　1．前田中遺跡遠望（北西から）
　　2．A地区西壁（東から）
図版3　1．B調査区（西から）
　　2．前田中遺跡出土物
図版4　1．ダヤ前遺跡遠望（東から）
　　2．石器出土状況
図版5　1．遺物出土状況（南から）
　　2．ダヤ前遺跡出土物
図版6　1．フケ上地点遠望（南西から）
　　2．東　　壁（南から）
図版7　1．完掘状況（南から）
　　2．半兵衛屋敷地点遠望（北東から）
図版8　1．西　　壁（南から）
　　2．完掘状況（北から）

第１部　地域概況と調査要領

第１章　地　域　概　況

第１節　位 置 と 地 形

匹見町は，島根県の西端部にあって，南西流する高津川の右支である匹見川の上流に位置し，中国脊梁山地を背して広島・山口の２県に接している（第１図）。

このたび県営圃場整備事業に伴って，詳細分布調査を実施した下道川地区は，匹見町大字道川地域の１集落にあたるもので，その域は脊梁を挟んで広島県と接する南東部に存在している。

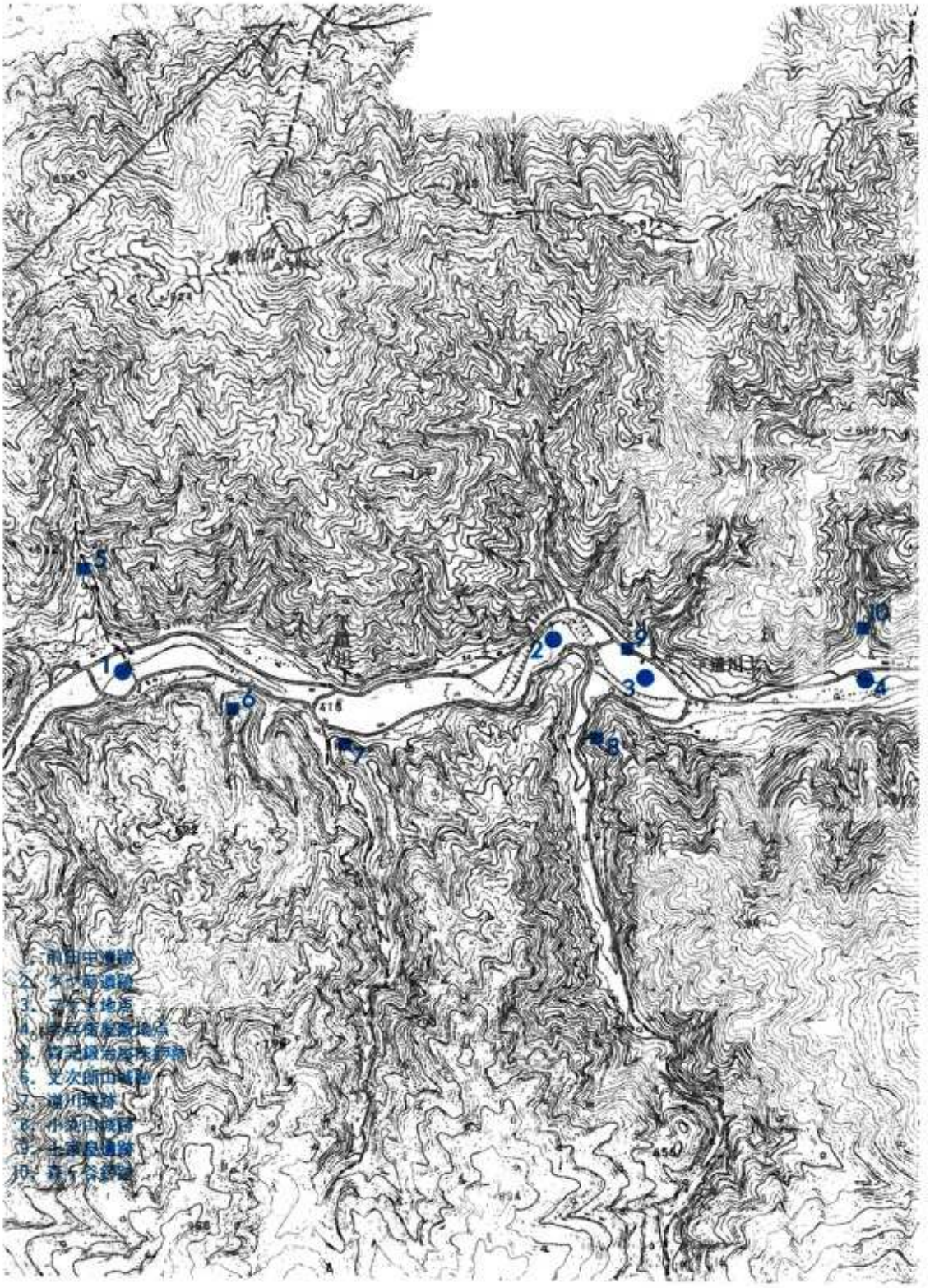
本地区は，中生代白亜紀の火山活動によって生成された流紋岩質凝灰岩類で占められており，また山地は，北東一南西に走る数条の断層谷（匹見層群）から形成されている。その数条から成る断層谷のうち，本報告する下道川地区には，著名な臼木谷断層が縦走しており，そこを匹見川が肥沃な河岸段丘を形成して南西流する（第２図）。また，凡そ標高400～480m台を測る狭長な河岸段丘に沿って連なる山塊は，岩倉山（1,011m）・春日山（989m）などの1,000m内外の山々が並走する，といった山間地域に立地する。

第１図　遺跡位置図（I）

第2節　歴史的環境

標高400～1,000m測る本地区は，屹立する山岳地にあるため多雪・多雨域で冷涼である。林相は温帯林を中心とする落葉広葉樹で占められ，僅かに流域に沿ってカシ・ツバキ・サカキなどの照葉樹林がみられるにすぎない。こうした森林に覆われた立地性は，江戸初期ごろから始まった鉄業を活発させたらしく，数カ所の精鉄遺跡もみられ，それは明治・大正期の製炭業へ引き継がれていった。また匹見川が河内状を形成して周流する，その丘陵の山上には中世期の山城である丈次郎城跡・道川城跡・小丸山城跡もあって，下道川上には町指定の縄文後期の上家屋（うえなや）遺跡が存在していることなどから，本地区にも古くから土地に刻まれた各時代の歴史があったことが窺われる（第2図）。

（渡　辺　友千代）



第２図　遺跡位置図（Ⅱ）

第2章　調査の概略

第1節　調査に至る経緯と経過

本報告する町内詳細分布調査は，益田農林事務所から示された道川地域圃場事業計画に伴って，平成6年度に実施したものである。

本調査に先立ち，本地区は周知遺跡の散在地でもあるため，平成4年6月29Hには島根大学田中義昭教授を招き，計画地域内における調査対象地の選定を行った。その選定にあたっては，周知遺跡は勿論であるが，地形的立地をも加味して見聞した結果，最終的に4箇所としたものであった。

本分布調査の現地調査は，平成5年4月から同年12月まで費やし，匹見川下流にあたる前田中遺跡・ダヤ前遺跡・フケ上地点・半兵衛屋敷地点というように，上流側に向かって中途で本格調査も実施しつつ，逐次行っていた。とくに縄文早期と想定されたダヤ前遺跡の調査では，11月11日に田中義昭教授，同月14日には前島根大学教授の三浦　清氏，また15Hには山口大学中村博助教授の来跡を仰いで指導を得た。

第2節　調査にあたって

調査の概要については，2部で記述することにするが，調査地点及び遺跡名は，該地点の字名をもって呼称することにした。また地点・遺跡名の表明については，明確に遺跡と断定できるものを遺跡と称し，そうでないものを地点名で称すことにし，使い分けていることを始めに断っておきたい。なお略称については，ピット状のものをPとし，また土坑状のものをSKと称することにして統一している。

（渡　辺　友千代）

第2部　各調査地点の調査概況

第1章　前田中遺跡

第1節　地形的立地

本遺跡は，島根県美濃郡匹見町大字道川口89－2番地ほかに所在し，小字名を前田中（まえたなか）と称する地点にあたる（第2図・第3図・図版2－1）。

現地標高約410.74mを測る本遺跡地区は，南西流する匹見川の左岸にあって，その河川に沿って狭長な河岸段丘が発達し，そこは水田地として拓けている。また南東の山裾側には民家が列居していて，町道道川線が貫通する。同様に，対岸にあたる北西側においても匹見川に沿って河岸段丘が狭長ながらつづいているものの，北西側よりは狭く，そこを県道波佐匹見線が北東－南西方向に貫通している。このように山間地にしては地形的には恵まれており，また交通的にも主要な往還筋にあたっている地区でもある（第3図・図版1）。

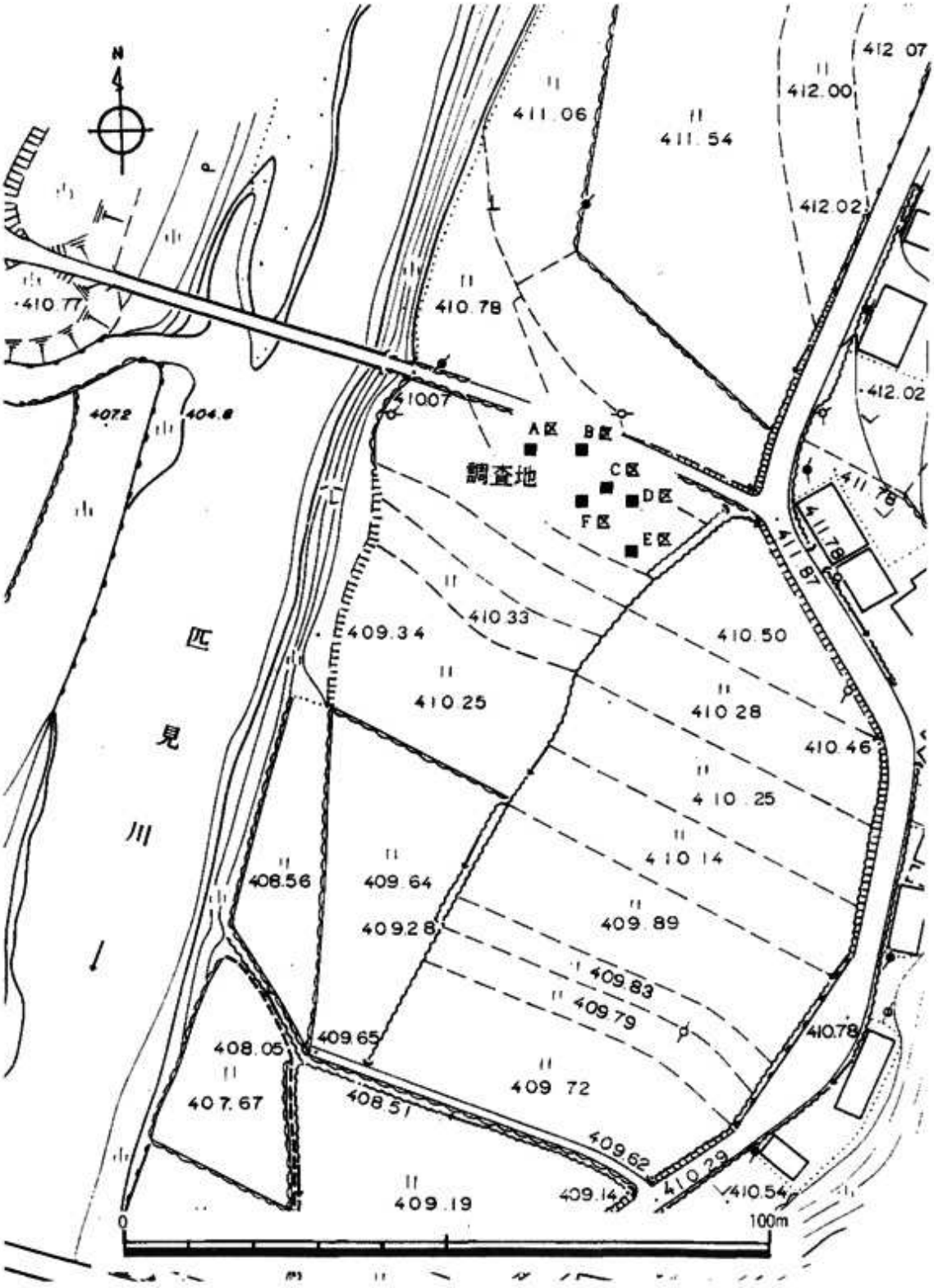
第2節　調査の概要

1．調査区の設定

本調査は対象地は，匹見川に比高差約5mを測った段丘面のほぼ中央部の水田地であって，対向する北東－南西方向には狭長な段丘が連なっているという位置に立地する（第3図）。

調査区の設定にあたっては，まず対象地の北西端に基点となる杭を任意に設定することから始めた。そして，その基点から磁北方向に2m測り，さらに東に2m測って2m四方の方形区を設けた。これをA調査区として，B調査区はA調査区から6m測った東方向に2mの方形区を設けたのである。また他の調査区については，B調査区から南方向へ6m測った地点のもの，さらにその2m方形区から東方向に6m測った地点に2箇所めのものを設けた。3箇所めのものは，東端の調査区から南方向に6m測った地点に設定した。つまりA・B調査区以外，3調査区を設けたのである。しかし地形状からみて標高が高くなっている北東側が気になるため，さらに1番めと2番めに設定した間に，2m北側寄りのものを設定し，計4箇所を設けたのである。

したがってA・B調査区を合わせて6箇所を設け，各調査区をA・B調査区からアルファベット順に右廻りにC～Fまでを接頭して呼称することにした。また発掘面積は2m方区形が6箇所であるため，


N
411.06
411.54
412.07
412.00
412.02
410.77
410.78
410.07
412.02
407.2
404.8
A区
B区
C区
D区
E区
F区
調査地
411.78
411.87
410.33
409.34
410.50
410.25
410.28
410.46
410.25
410.14
408.56
409.64
409.89
409.28
409.83
409.79
409.65
410.78
408.05
409.72
407.67
408.51
409.62
410.29
409.19
409.14
410.54
0
100m
匹見川

第3図　遺跡配置図（I）

計24m²であった（第3図）。

なお，基準となる標高については，下道川橋のKBMに求めたものである。

2．各調査区の概要

A調査区　本調査は，調査対象地の北西側に設定したものである（第3図）。

層序は，1層の水田耕作土（暗褐色土），2層の客土（灰褐色砂質土），3層の橙褐色土（酸化鉄の含浸による），4層の黒褐色砂質土，5層の灰褐色砂質土，6層の黄褐色砂土の順に堆積する。そのうち4層の黒褐色砂質土は，層厚15～30cmを測って全体に厚く，下位面を中心に数十点の縄文遺物が検出された（第5図）。その下層の灰色砂質土は7～17cm測ってやや薄く，下面の層界は乱曲する。また本層にも若干の遺物が出土しており，遺構陥入層のものと想定されるものの，遺構と断定できるものは確認されていない。6層の黄褐色砂土は，やや湿気おび円礫などの石体，また遺物・遺構も確認されていない。

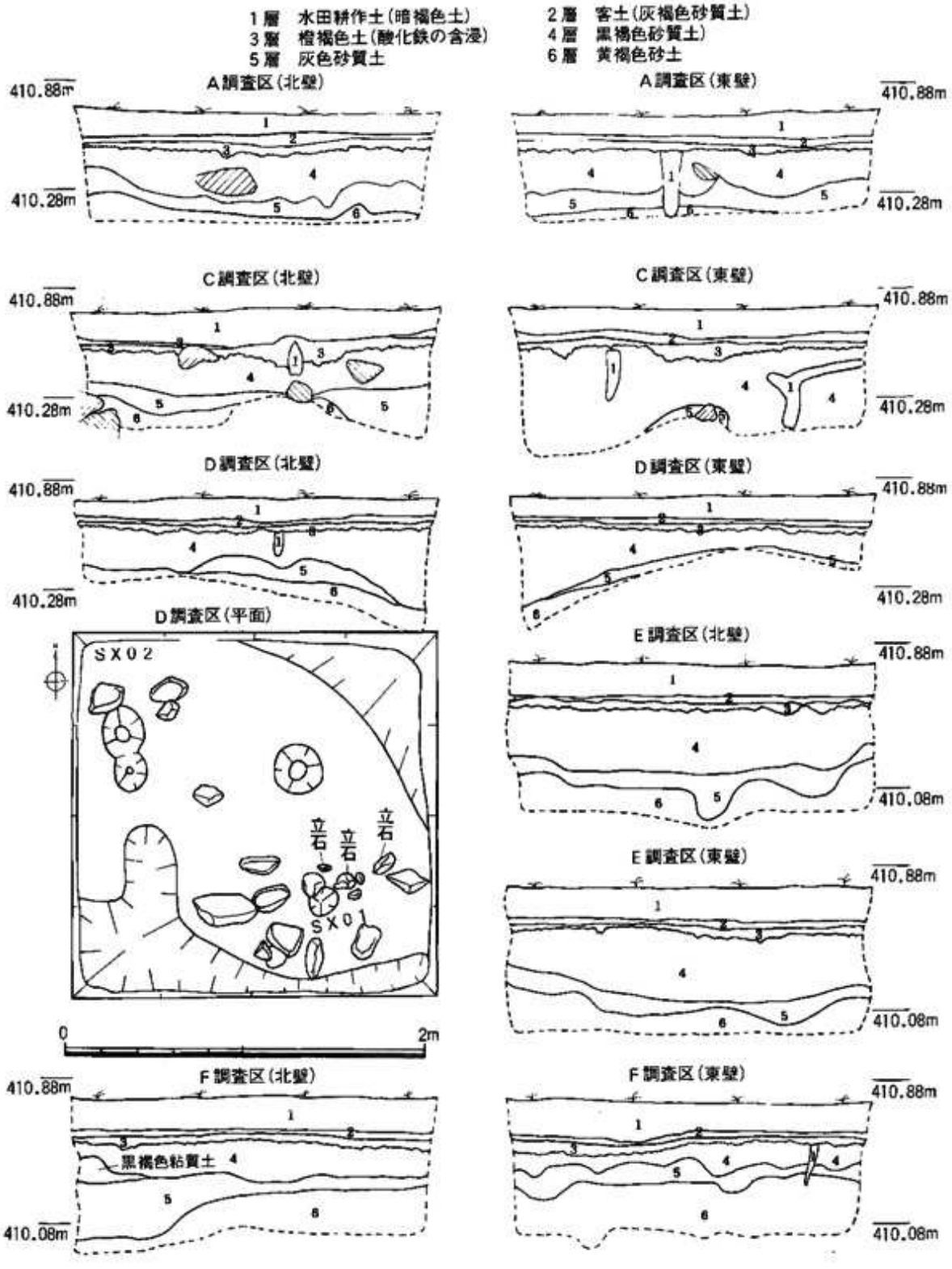
B調査区　本調査区は，掘削したものの完掘間際で2壁（北壁・西壁）が崩落したため，調査が不可能となった。したがって，本調査区については調査を行ってはいない。

C調査区　層序は1層の水田耕作土，2層の客土，3層の橙褐色土，4層の黒褐色砂質土，5層の灰色砂質土，6層の黄褐色砂土の順に堆積する（第4図）。

そのうち2層の客土（灰褐色砂質土）は，北壁を見るにかぎり尖滅部分が確認できるとともに，全体的に凹凸して一定でない。また20～60cm測る4層の黒褐色土でもいえることで，厚薄差がはげしく，本層には生物痕らしい表土からの暗褐色が嵌入する。遺物としては，数点の縄文土器・石器が下位面を中心に出土したが（第5図），遺構は検出されていない。5層は，砂礫を含んだ灰色砂質土で，20cm大の円礫もみられる。ただし遺物・遺構は確認されていない。

D調査区　本調査区における1～3層は，ほぼ水平に堆積する。次層の黒褐色土は，層厚10～45cmを測って厚薄差がある。これは本層において遺構の存在からくる，その深度差の現出とみることができよう。

これらの遺構は，4層下面から5層の灰色砂質土および6層の黄褐色砂土層まで陥入しており，柱穴状のピット2基，土坑2基，配石1基が検出された（第4図）ほか，また2点の縄文土器片を伴っていた（第5図）。そのうち2つの土坑は，いずれも坑形は明らかでないものの，1つは深さ43cm，もう1つは深さ36cm測って比較的深かった。また，柱穴状のピット（P01）は径約27cm，深さ14cmをはかり，P02の深さ10cmであって，これらの土坑中には黒褐色土が陥入する。また配石遺構は集石の状況から2基と想定され，そのうちSX01は短径約80cm，長径140cm測って楕円形を呈する。配石には10～50cmの河原石が用いられ疎間的に，高まり状になった上面に，多くは平坦に配置しているが，土坑は認められない。ただし立石には据置き穴が確認され，そこには黒褐色土が陥入


1層　水田耕作土(暗褐色土)
2層　客土(灰褐色砂質土)
3層　橙褐色土(酸化鉄の含浸)
4層　黒褐色砂質土)
5層　灰色砂質土
6層　黄褐色砂土
A調査区(北壁)
A調査区(東壁)
C調査区(北壁)
C調査区(東壁)
D調査区(北壁)
D調査区(東壁)
D調査区(平面)
E調査区(北壁)
E調査区(東壁)
F調査区(北壁)
F調査区(東壁)
410.88m
410.28m
410.08m
SX02
SX01
立石
立石
立石
黒褐色粘質土
0
2m

第4図　土　層　図　(I)

した。またSX02としたものは，SX01よりレベルは14cm低く，きわめて配石は疎間的であり，しかも偏在する位置からは配石としてグルピングできるものかは判断できなかった。

これらの検出された土坑，あるいは柱穴状ピット・配石，また2点の土器の出土から，そこには生活の営みの根痕をみることができるものの，狭隘な発掘範囲ということもあって，具体的に個々の機能的な構図は描くことはできない。また各遺構の検出に比べて，2点という細片の土器の僅出は気になった。

6層は，黄褐色砂土であるが，本層および下位は掘削しなかった。

E調査区　調査対象地の南東端に設定した調査区。その1層の水田耕作土は，層厚18～20cmを測り，比較的厚い。2層は，客土で層厚3～5cmを測る。また酸化鉄分が含浸した3層の橙褐色土は，3～7cmを測って含浸差があるものの，全体的にはほぼ水平に推移している。4層の黒褐色土は，20～48cmを測って上面の層界は水平であるものの，下面の層界は深浅差がはげしい。

とくに本調査区では，石体はほとんどみられず，大半は砂粒質の堆積層であった。遺物においても，いずれの層位でも確認することができなかったことからみて，往古期における本調査区地点は，匹見川の周流域端であった可能性が地形的にも理解できるそうである（第3図）。

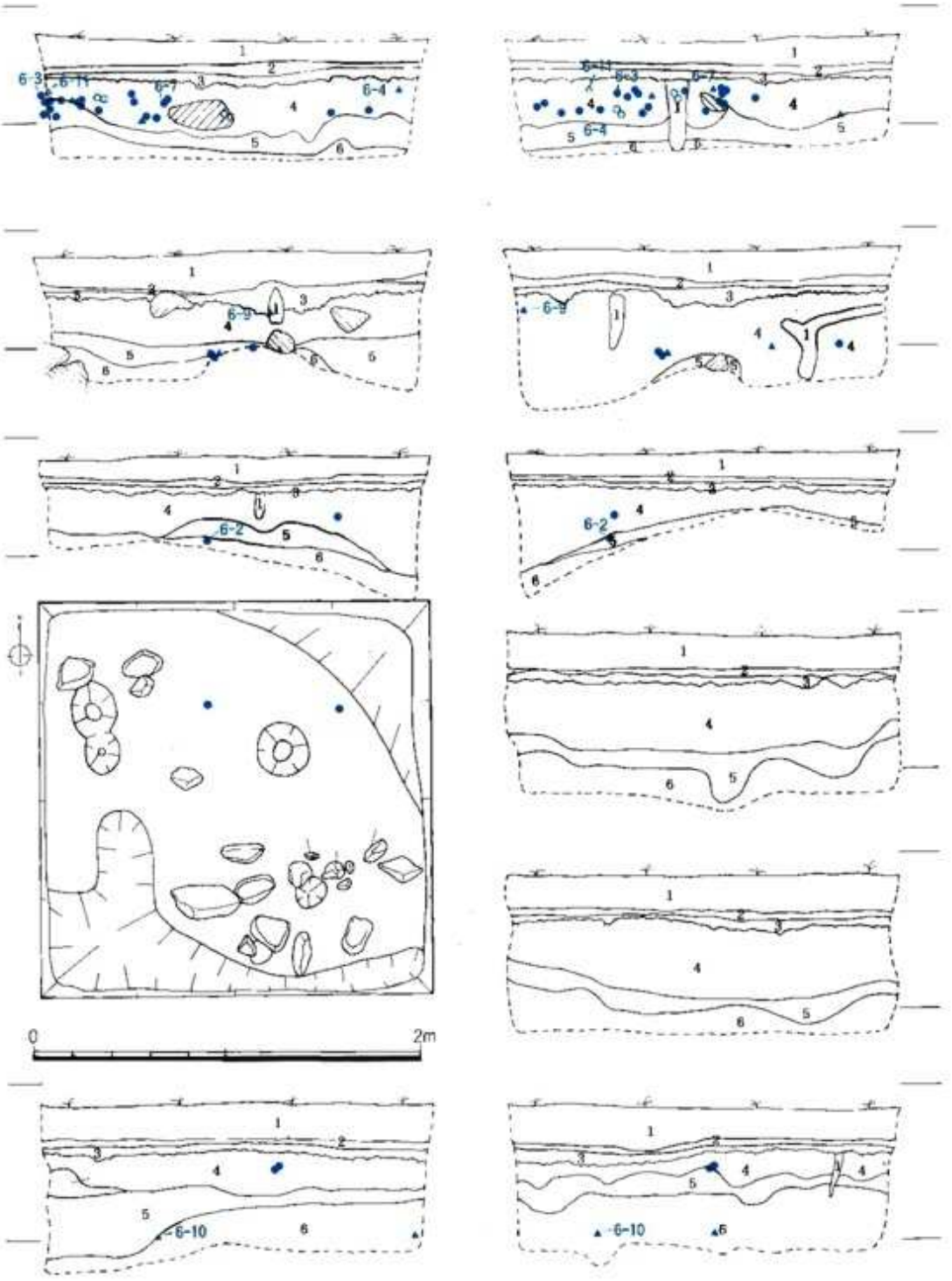
5層は灰色砂質土で，層厚5～18cmを測って厚薄差がある。遺物・遺構とも検出されていない。6層は黄褐色砂土層である。本層においても遺物・遺構は検出されておらず，きわめて周流域における砂性の自然堆積層の感がした。

F調査区　1層の耕作土（暗褐色土），2層の客土（灰褐色土），3層の酸化鉄層（橙褐色土）の順に堆積する。4層は黒褐色土で，砂質・粘質性である。北壁を見る限り，ほぼ水平に堆積しているものの，東壁においては下面が波状に推移し，厚薄差がみられる。本層の下面に2点の縄文土器が出土したものの，遺構らしきものは確認できなかった。5層の灰色砂質土からも2点の石器剥片が出土しているが（第5図），上層の2点の土器とともに北面からの流出物の可能性が層序状況から考えられる。黄褐色砂土の6層は，北東側は層厚約30cm測ってやや厚いが，南西側は約10cm測って薄く，周流域であったと想定される南西側へ陥ち込んでいる。本層からは遺物・遺構とも確認されていない。

第3節　出 土 遺 物

1．はじめに

後世の人為層である1・2層における出土遺物は，実測せず層名のみ記して採り上げたが，3層以下からは総て，平面位置および垂直分布をも実測し，また層名ごとに捉えて採り上げる，といった方法行った。したがって，第5図（遺物投影図―(1)）における図化表示のものと実査した遺物との層名において若干のくるいがあることは確かである。



第5図　遺物投影図（I）

2．遺物の概要

本遺跡における出土遺物の総数は，130点であった。その内訳は，縄文土器片103点・石器およびその剥片12点（黒耀石は別）・陶磁器類９点・炭化物４点・黒耀石片２点である。また出土層位は，陶磁器類で１・２層，他の遺物の大部分は４層黒褐色砂質土の下位面を中心として出土している。これらの土器は総て細片で，径５cmを越えるものは数片しかみられず，時期を決定することは難しいものの，中津式・一乗寺Ｋ式に比定されるものが散見されていることから，縄文後期初めから後期中ごろのものと想定できるであろう（第６図・図版３－２）。また，石器は剥片を中心とし，製品といえるものは皆無であった。

3．実測遺物（第６図・図版３－２）

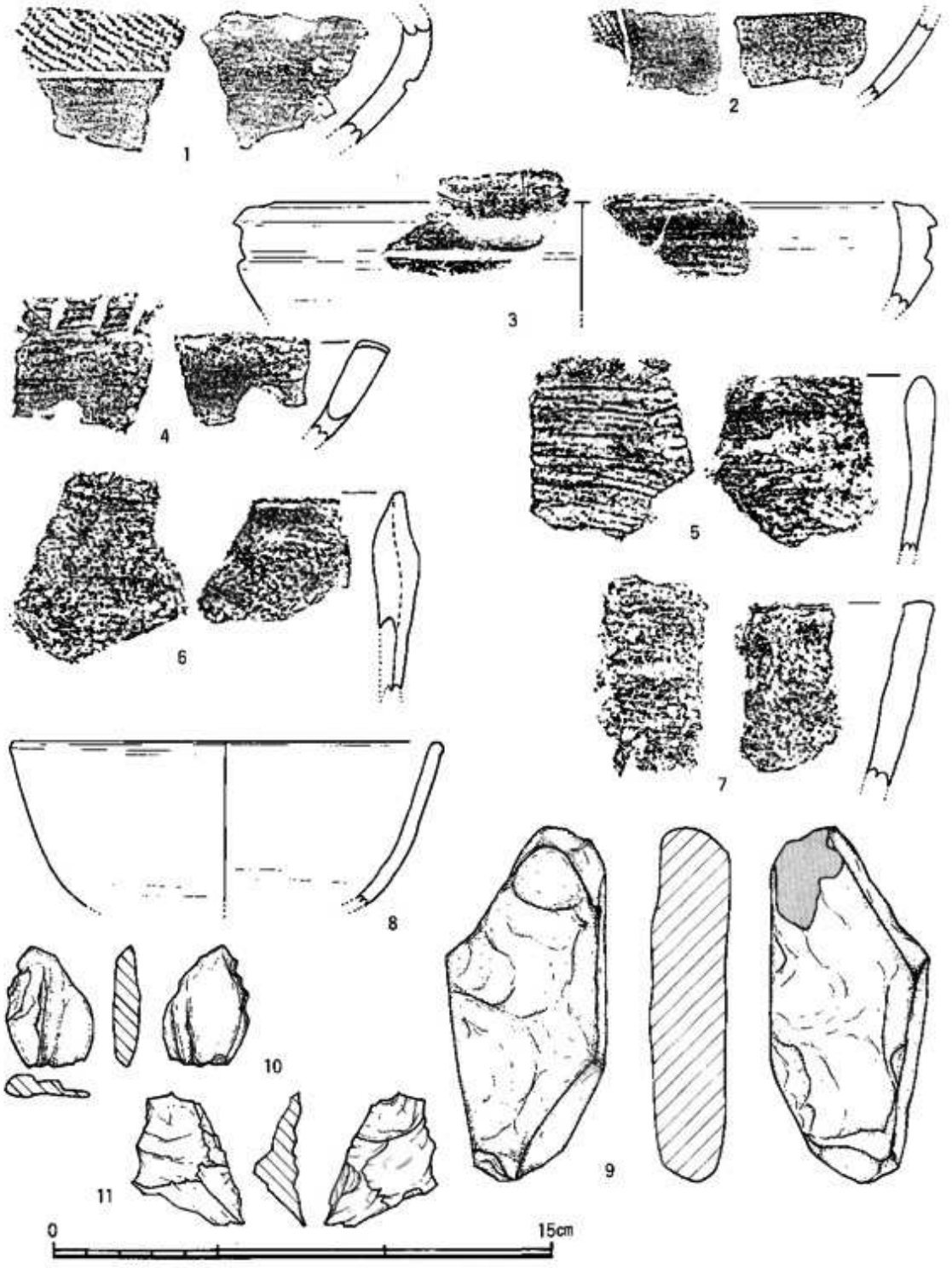
縄文土器　１は，磨消縄文土器の口縁部。内外面ともケラ工具で精緻に磨き，区画内を縄文で埋める。色調は茶褐～暗褐色を呈し，きわめて堅緻である。区画間が比較的幅広いことからみて，中津式と想定される。２も磨消縄文土器で，Ｄ調査区の４層に出土したもの（第５図）。色調は橙褐～暗褐色を呈し，つくりが薄い。おそらく一乗寺Ｋ式に比定できるものであろう。３は，Ａ調査区の４層に出土した深鉢形の粗製の口縁部。口唇に外面に向かって折りかえしとなり，その部下に２本の平行沈線がみられる。内外面ともナデ調整とし，外面に煤が付着し，胎土の色調は橙褐色で，焼成は比較的良好である。

４は，Ａ調査区の４層に出土した精製土器の口縁部。内外面ともヘナタリ巻貝による磨き調整とし，口唇上面部に刻みを施している。色調は内外面とも黒褐色を呈し，焼成は堅緻である。５～７は，いずれも深鉢系の口縁部で，直行ぎみの粗製土器。調整は巻貝による条痕文。色調は５が暗褐色，６が黄褐色，７が灰褐～暗褐色を呈し，いずれの胎土も砂粒を含んで粗い。このうち７は，Ａ調査区の４層に出土したもの（第５図）。

磁器　８は，客土に出土した青磁碗。口端外面にスジ状の沈線がまわるが，厚い施釉のため，器面はなめらか。色調は薄緑～灰緑を呈し，青釉はきわめて厚い。器形・施釉手法からみて，おそらく15世紀後半から16世紀初めのものと想定される。

石器　９は，Ｃ調査区の４層に出土した安山岩。外面剥離したと思われる痕跡がみられるものの，自然裂か人口裂かは風化していることもあって判断できない。しかし材質は安山岩であるので，原石として持ち込まれたものであることは確かである。10は，粘板岩質のもの。周縁部に剥離，あるいは擦痕らしきものが確認されるが，人為的なものかは判断できない。またスジ状の凹みも，石目による自然的裂痕かも知れない。11は，Ａ調査区の４層に出土した乳白色の黒耀石で，二次加工は認められない。

（渡　辺　友千代）



第6図　遺物実測図（I）

第2章　ダヤ前遺跡

第1節　地形的立地

本遺跡は，島根県美濃群匹見町大字道川口275番地に所在する。該地は，匹見川が大きく屈流して河岸段丘を形成した左岸に立地している。一方，北東側には亀井谷川が清流していて，100m地点で匹見川と相会しているため，三方をとり囲んだように舌状部を形成して北西側に出張っている。遺跡はその水田地として拓れている舌状を成した舌根部に存在する（第2図）。

第2節　調査の概要

1．調査区の設定

調査地点は，匹見川との比高差約6mあって，現地標高約431.86mを測る水田地に設けることにした（第7図）。

調査区の設定にあたって，まず調査地点での磁北方向を意識し，また発掘面積なども考慮して実測することにした。その結果，調査区は幅2m，長さ10mとし，磁北方向に設定したのである（第7図）。

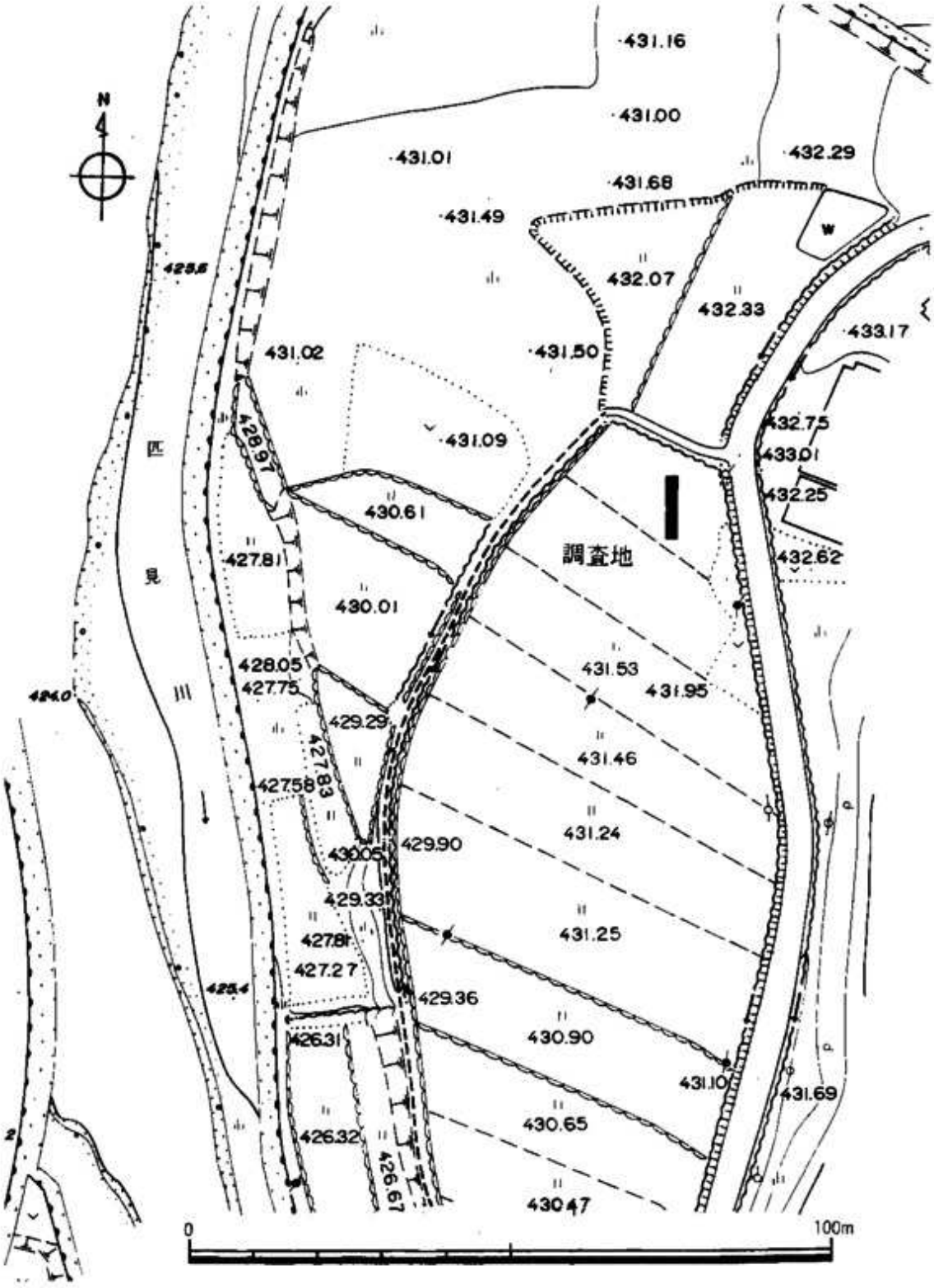
2．調査の概要

調査の方法　狭隘な調査区であったため，先行してトレンチを設けて掘削することなく，層序を意識しながら平面的に掘削していった。なお，遺物が検出された場合は平面位置，標高位置および層位も実測，あるいは確認しながら採り上げた。

層状と層位　層序は，1層耕作土（暗灰色土），2層茶褐色砂質土，3層茶褐色砂礫土，4層橙褐色砂質土，5層淡黄砂礫土の順に堆積する（第8図・図版5　1）。

そのうち1層は水田耕作土で，粘質おびた暗灰色土である。層厚は10～16cm測って，一般的に薄い。2層は，15～25cm大の円礫を含んだ茶褐色砂質土。下位層の3層も同様であるが，茶褐色を呈するのは酸化鉄の含浸によるものである。層厚は10～25cm測って，層界は乱曲する。3層は，径20cm前後の円礫を多く含んだ茶褐色砂礫土である。土層の色調は上位層の2層と同様に，酸化鉄の含浸によって類似するが，層状からみるかぎり明確に異なる。層厚は10～30cm測って，やはり層界は乱曲している。

遺物が出土した4層は，橙褐色を呈した，やや粘質性の砂質土である。層厚は10～30cmを測って厚薄差があり，20cm前後の円礫を含んでいる。遺物は下層面を中心に，玄武岩質・粘板岩質・砂岩


N
431.16
431.00
431.01
432.29
431.68
431.49
432.07
432.33
433.17
431.02
431.50
431.09
432.75
433.01
432.25
432.62
428.97
430.61
427.81
調査地
430.01
428.05
427.75
431.53
431.95
429.29
431.46
427.83
427.58
431.24
430.05
429.90
429.33
431.25
427.81
427.27
429.36
426.31
430.90
431.10
431.69
430.65
426.32
426.67
430.47
0
100m

第7図　遺跡配置図

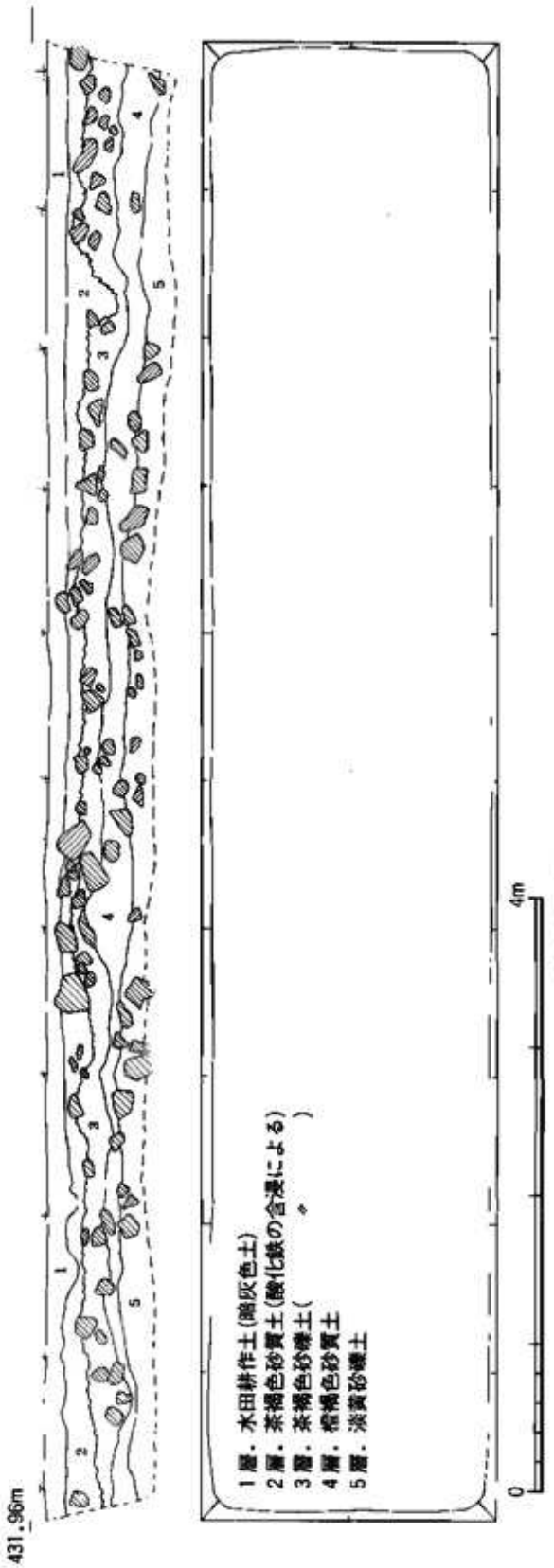
質の剥片が27点，土器片１点の計28点が検出された（第９図・図版４－２）。しかし，石器剥片の中には，調査後に検討した結果，数点は遺物として捉え難いものも含んでいた（第９図の図示のものは，調査時に実測に基ずいたもの）。なお，遺構については確認できなかった。

５層は，10～30cm大の石体・砂利・砂粒などの石塊が覆う淡黄砂礫層である。下層に向けて20～30cm掘削を試みたが，畳重たる石塊に阻まれ，また層状から判断しても考古学上，無意味と思われたので以下は中止した。

第３節　出　土　遺　物

１．遺物の概要

遺物として捉えられたものは，土器片の１点，石器及びその剥片と思われるもの27点，計28点であった。これらの出土遺物は，すべて４層の橙褐色砂質土に検出したものである。しかし，この中でも石器等については，人為的加工が施していないもの，また材質的に疑問がのこるものも実測している可能性もある。ただ，現場の諸状況の中で，これらを感覚的に遺物として認識させた中には，遺物直視だけで一概に否定できないものも多く含まれているものと考える。



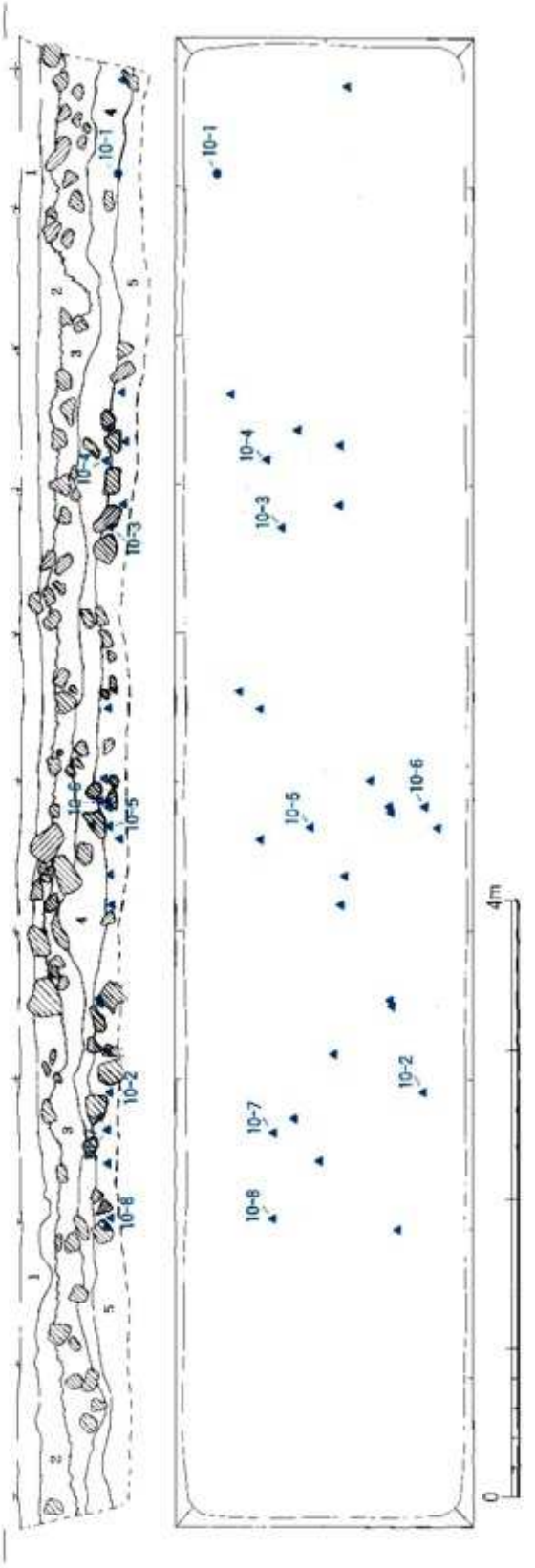
第８図　土　層　図　(II)

2．実測遺物（第10図・図版５－２）

土器　１は，４層から出土した粗製の無文土器片。器壁は0.7～1.2cmを測り，厚薄差があって凹凸する。凹凸は指押圧による整形のためと思われる。胎土は比較的緻密で，繊維混入されている可能性がある。色調は灰褐色を呈し，外面には媒が付着する。おそらく押型文土器と平行する時期のものであろう。

石器　２～８は，石器および石器剥片で，土器片と同様４層から出土したもの。そのうち２は，玄武岩質の楕円形の石器で，器高9.3cm，器幅7.3cmを測る。周縁には打裂痕がみられ，また部分的に敲打による剥離痕が顕著である。ハンマーに使用した敲石と思われるもの。３は，粘板岩質のもの。背面には３方向からの打点がみられるが，二次加工はない。裏面は自然面で，石核であった可能性もある。４は，玄武岩質の剥片石器。背面に３方向から遠近による打点が認められるが，細部調整はみられない。また裏面は，単一敲打による裂痕があって，一方の斜傾面に局部細部調整が認められる。

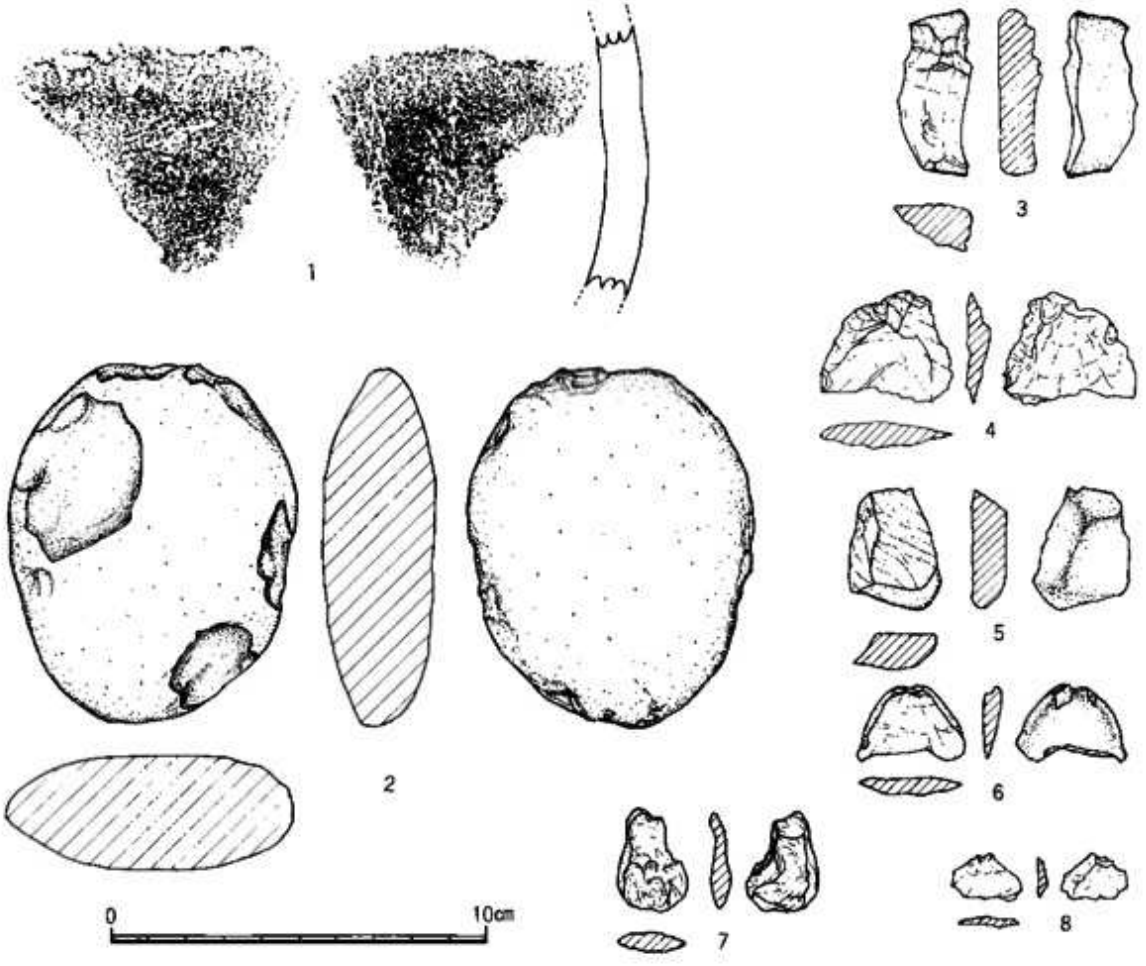
５は，剥離面が認められるものの，石目による自然剥離の可能性がある。６は，蛇紋岩質もので，上面頂部に打瘤裂痕がある。裏面は自然面とし，下面には間接的な押圧で剥離されたと思われる裂痕がみられるが，それは二次加工ではない。７は，粘板岩の材質のもので，裏面に抉



第９図　遺物投影図（II）

りあるいはノッチが認められる剥片石器。8は，安山岩質のもので，1.2cm×1.8cmを測る剥片石器。

（渡　辺　友千代）



第10図　遺物実測図（II）

第3章　フケ上地点

第1節　地形的立地

本地点は，島根県美濃郡匹見町大字道川口344－1番地に所在する。該地は，南側を匹見川が半円形状に周流して，肥沃な河岸段丘を形成した右岸に存在している。また北面には，美都町境の境山としての800m内外の山塊が東西に横たわる。発掘地点は，その間の河岸段丘が発達し，水田地と化している山裾側寄りとした（第11図・図版6－1）。

本地点は，匹見川との比高差約9mあって，現地標高439.74mを測る水田地で，10m北面の山裾には北東－南西に県道波佐・匹見線が走っている。また，水田地の南面へはゆるやかに下がっていって，約300m測った地点には匹見川が南西流している，といった地形に立地する。

第2節　調査の概要

1．調査区の設定

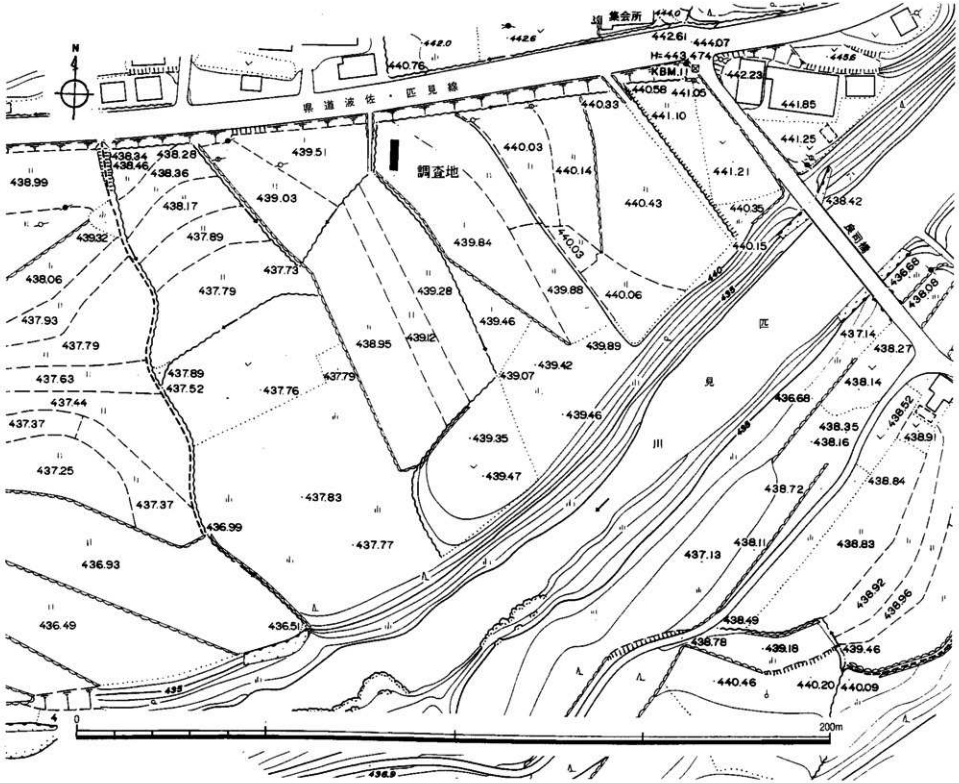
調査地点の選定について，まず比高差4m測る南面側の段丘端より，北面側の山裾が領地ではないかと判断した。また東－西の関係では，低位の西面よりは高位にある東面側がよいのではないかと判断し，最終的に該地点を選定したのであった。その地点は，「フケ上」という字名が示すように湿田地であった。

発掘区の実測は，任意に磁北方向に幅2m，長さ8m測るものとした（第11図）。

2．調査区の概要

本調査における基本的層序は，1層の水田耕作土（灰黒色粘質土），2層の黒褐色土，3層の灰褐色砂土，4層の黒褐色粘土，5層の白灰色粘土，6層の黒色粘土，7層の灰色砂土の順である（第12図・図版6　2）。

そのうち1層の層状は，層厚40～50cm測り，水田耕作土にしてはきわめて厚層である。また層厚は，北側（山裾）に向かって薄くなり，南端（匹見川）側は深い。2層の黒褐色土は，10cm未満の角礫を含んだ有機質土。層厚は約18cmを測り，北側に向かって薄くなって尖滅している。層状からみて，おそらく山裾側からの嵌入堆積土であろう。本層からは腐朽した無加工の木枝が比較的般出した。3層は，層厚20～40cmを測る灰褐色土。層状は砂土で，10cm未満の礫を含み，山裾側が厚い。遺物や遺構は検出されていない。4層は，黒褐色粘土で，40cmばかりを測り，ほぼ水平に堆積するが，若干，山裾側が薄い。やはり本層からも遺物・遺構は検出されていない。



第11図　遺跡配置図

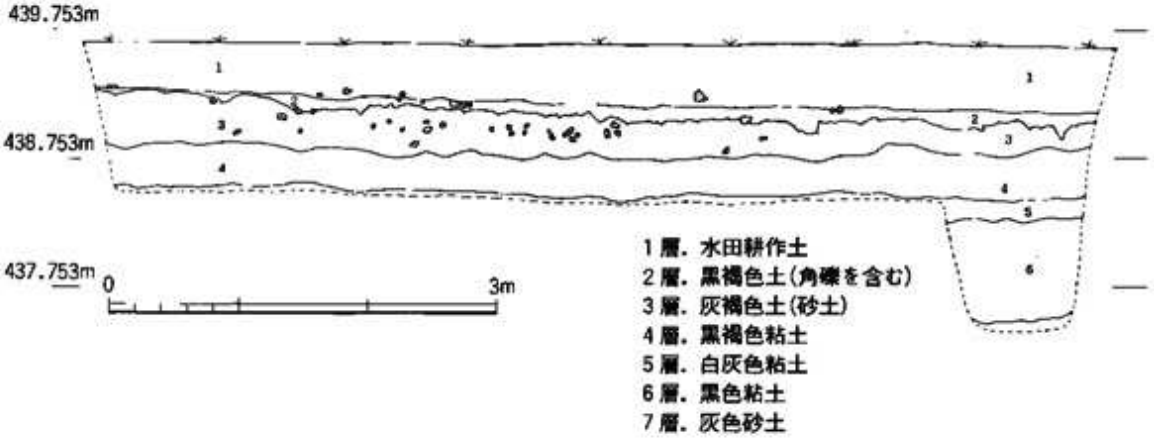
この地点で既に１ｍを越えて掘削しており，しかも粘質性，無出土という難渋から，以下は下位層の層序関係を把握する程度の掘削に止め，南端面の部分掘りのみとした。

５層は，粘土である白灰色土であった。層粒は緻密で，礫などは階無。南端面の層厚を見るかぎり，10～13cmを測る。６層は黒色粘土である。やはり礫などはみられず，層粒は緻密である。きわめて湿気おび，下面は砂質性，層厚は80cmを測る。人為的な遺物・遺構とも確認されていない。７層は，灰色砂土層で，湿気おびる。また下面は円礫が露頭していることから，８層として捉えられる円礫砂礫層と想定される。

第３節　結　　句

本地点における層状は，下位層に向かっていくほど湿気が増す。これは北面側からの伏流水のためであるが，これを粘土質性という堆積層序がさらに増幅しているものと考えられる。しかも地形的に，本地点は匹見川の蛇行による周流域であった可能性が強く，沢地を形成していたものであろう。本地点におけるこうした立地性が，おそらく人々の生活域としての場を狭めていた主因になっていたものと考えられる。

（渡　辺　友千代）



第12図　土　層　図　(Ⅲ)

第4章　半兵衛屋敷地点

第1節　地形的立地

本地点は，島根県美濃郡匹見町大字道川口422　1番地に所在する（第2図・第13図・図版7－2）。その地点は，100m測る南東側を匹見川が南西流し，また一方，100m測る北西側は北東－南西方向に800m内外を測って山地が走り，その間の河岸段丘に存在している。河岸段丘面は，水田地と化されており，また山裾側には山地を背負って民家が並居しているとともに，その前面には県道波佐・匹見線が貫通するといった立地にある。

第2節　調査の概要

1．調査区の設定

調査地点は，山裾と河岸段丘端のほぼ中央部に求めることにした。その地点は小字名で半兵衛屋敷と呼ばれ，現地標高452.83mを測る（第13図・図版7－2）。

調査区は調査地点とした水田地に，まず任意に磁北方向を基準として幅2m，長さ7mを設定した。なお基準とする標高は，調査区から50m西側の県道沿いに設けられたKBMに求めたものである。

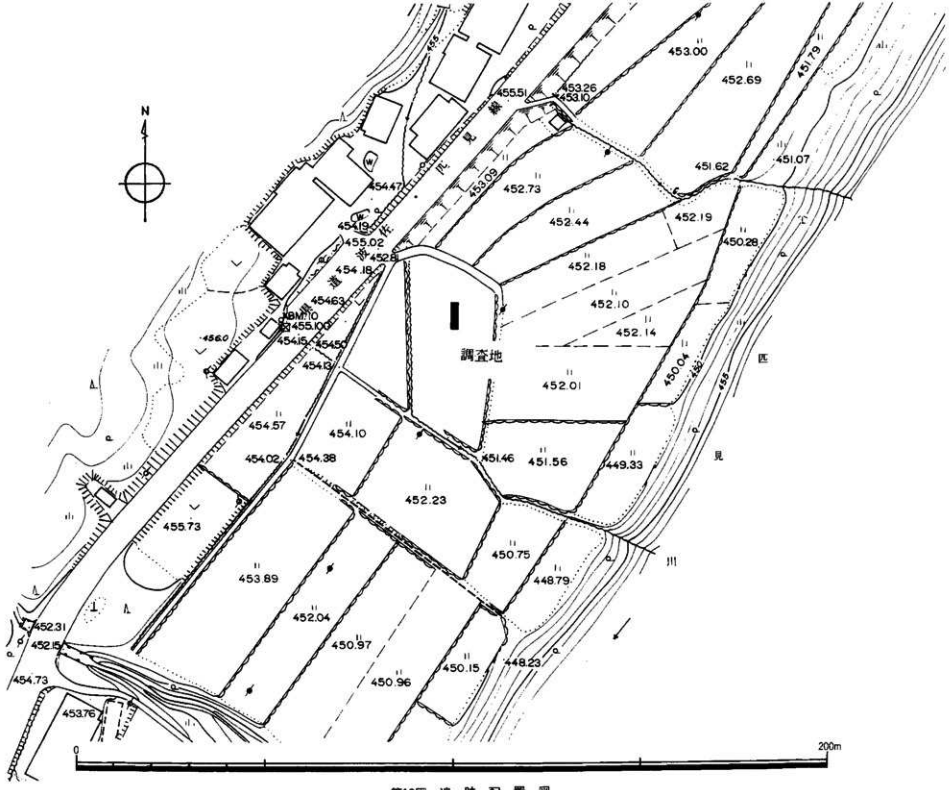
2．調査区の概要

基本的層序は，1層の水田耕作土，2層の客土としての灰褐色砂質土，3層の角礫を含んだ茶褐色土，4層の黒色粘質土，5層の黄灰色角礫層の順に堆積する。

その1層は水田耕作土で，層厚12～16cm測る。水田耕作土にしては粘性を欠く。2層は客土と判断される灰褐色土で，砂粒を含む。層厚は3～6cmを測って，厚薄差がある。1・2層とも遺物は出土していない。

3層は，酸化鉄が含浸する茶褐色土で，10cm大の角礫を多く含んでいる。層厚は3～10cmを測って厚薄性みられるが，南半部は全体に薄く，その端部に至っては尖滅する。4層は，角礫を含んだ黒色粘質土。層厚は，8～30cm測って厚薄差がある。部分的に遺構らしき陥ち込み（第14図・図版8）が認められたが，遺物は出土していない。

5層は，角礫を含んだ黄灰色土。層厚は凡そ30cmを測って下位層面との層界は，ほぼ水平に堆積する。角礫は10～30cmを測り，上位層のものと比べて，やや大きい。本層には4層からと想定される陥入坑が確認されたが，その性格ははっきりしない。


N
調査地
氏見橋
氏見川
453.00
452.69
451.79
455.51
453.26
453.10
451.62
451.07
453.09
452.73
452.44
452.19
450.28
454.47
455.02
452.8
454.19
454.18
452.18
454.63
455.100
452.10
452.14
454.15
454.50
454.13
452.01
450.04
454.57
454.10
454.02
454.38
451.46
451.56
449.33
452.23
455.73
450.75
448.79
453.89
452.04
452.31
452.15
450.97
450.15
448.23
454.73
450.96
453.76
0
200m

第13図 遺跡配置図

それはピット（P）5穴，土坑状（SK）もの3基である（第14図）が，本層において角礫の塡充もあってか，見逃していたものらしい。というのも，それに気づいたのは基盤層である6層の砂礫に明確に検出されて，はじめて思考して判ったことなのである。したがって図示しているものは，5層と6層との層界に検出されたものであって，深度点については真憑性はない。

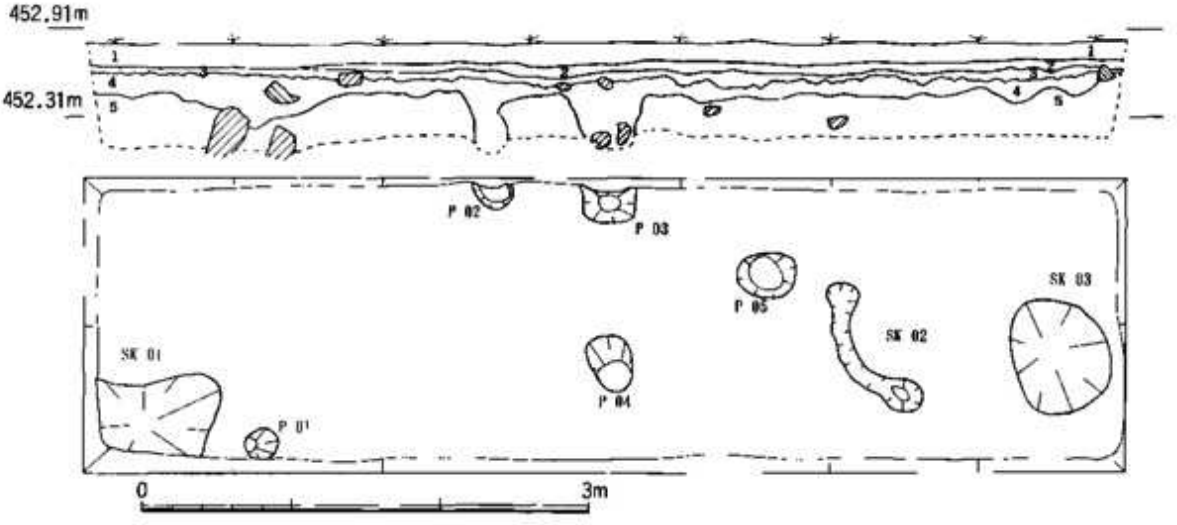
これらの遺構と想定されるものには，すべて4層の黒色粘質土が陥入していることからみて，その構築面は，同層からのものであったと捉えられる（第14図・図版8－1）。

第3節　結　　句

層状からみる限り，3層・4層・5層は，角礫の共出などから，これは山地の嵌入層と想定される。水田耕作上である表土において，粘性を欠くのは，下層における，そういった層状に要因しているものと思われる。しかし，その成因が人為的あるいは自然的かについては明確ではないが，層序関係からみるならば，4層上面の平削が考えられるものの，後者の方が強いものと認識した。

また遺構と想定されるものは，その構築面は4層であったと捉えられ，それは基盤を成す6層で確認できたが，共伴の遺物が皆無であり，時期及び性格は判然としない。遺構の陥入型態あるいは坑形からみて，それらが遺構であることは確かであろう。

（渡　辺　友千代）

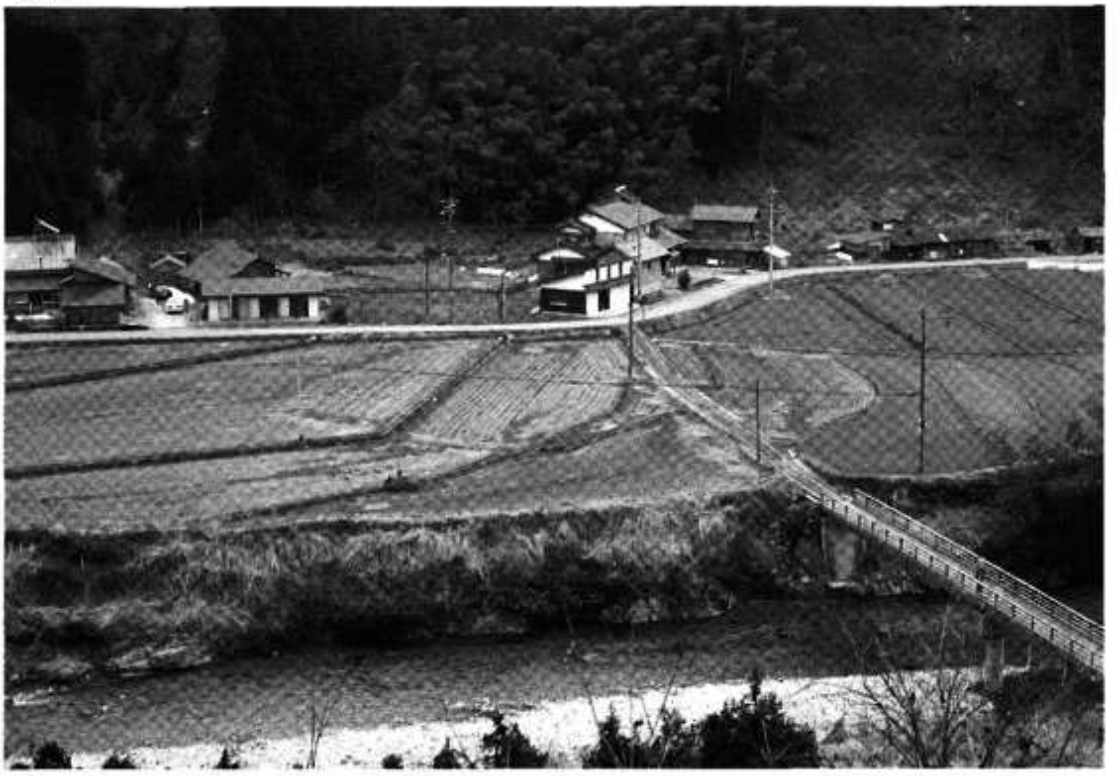


第14図　土層・遺構図

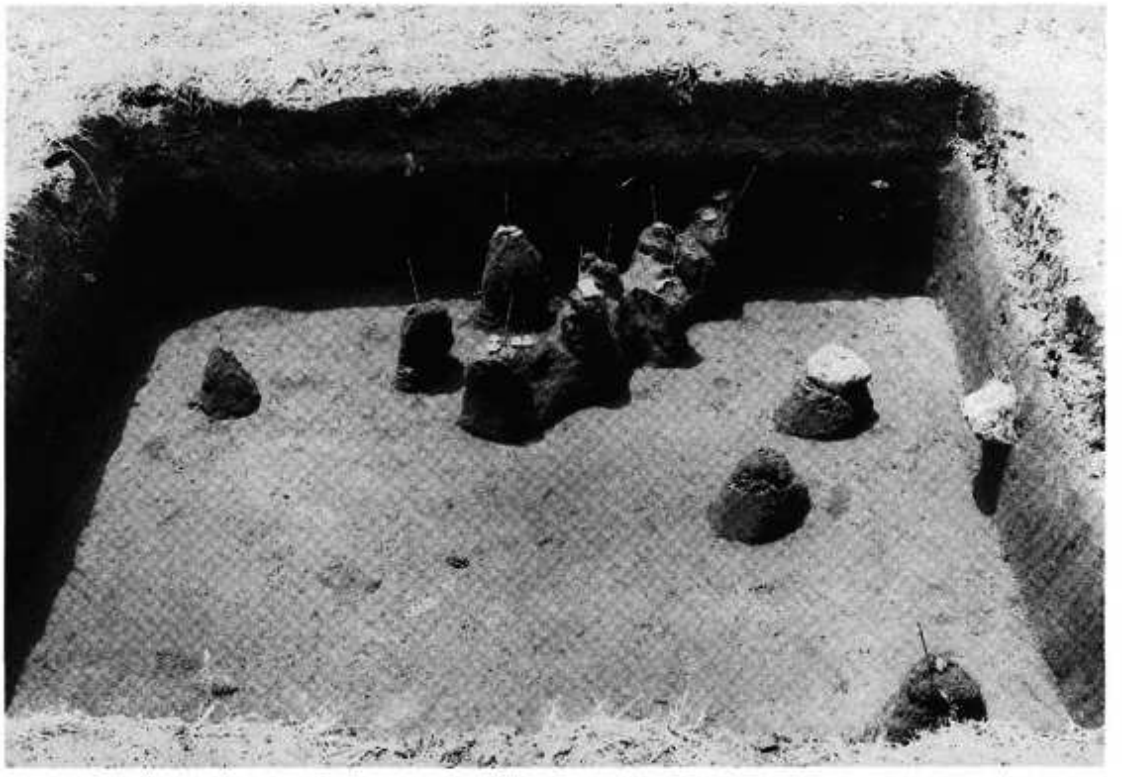
図版 1

下道川地区の俯瞰

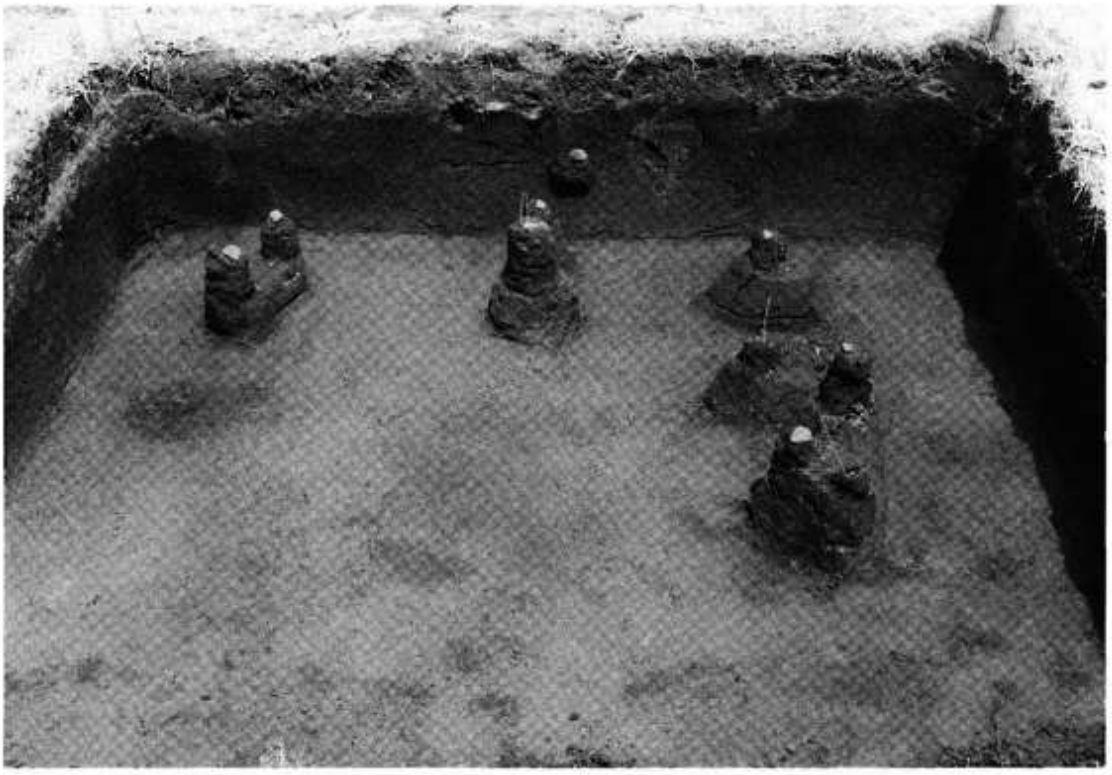
図版 2



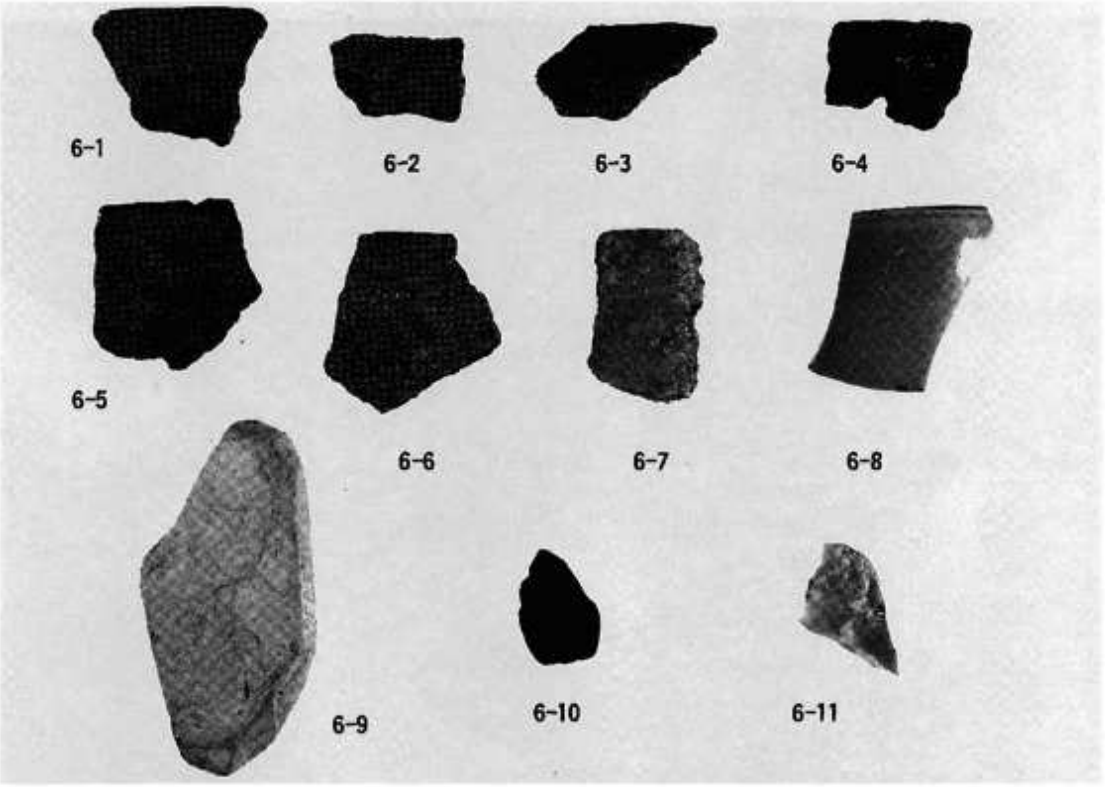
1．前田中遺跡遠望(北西から)



2．A地区西壁(東から)



1．B調査区（西から）



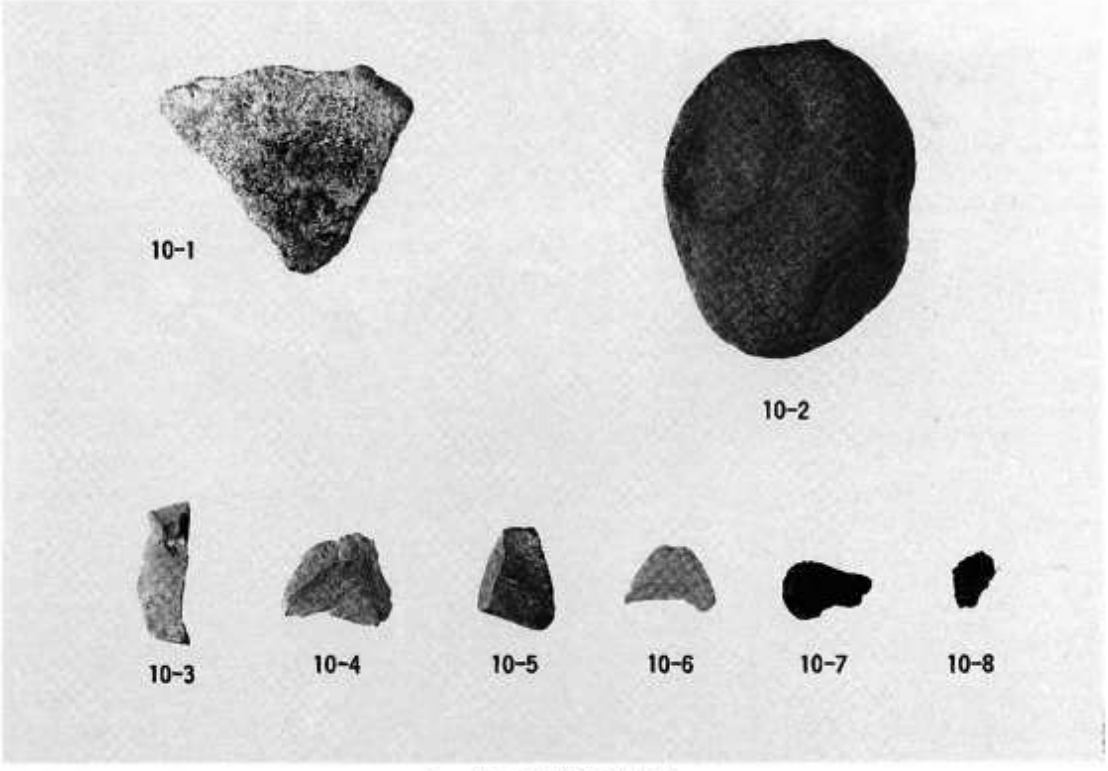
2．前田中遺跡出土物

図版 4

1．ダヤ前遺跡遠望(東から)

2．石器出土状況

1．遺物出土状況（南から）



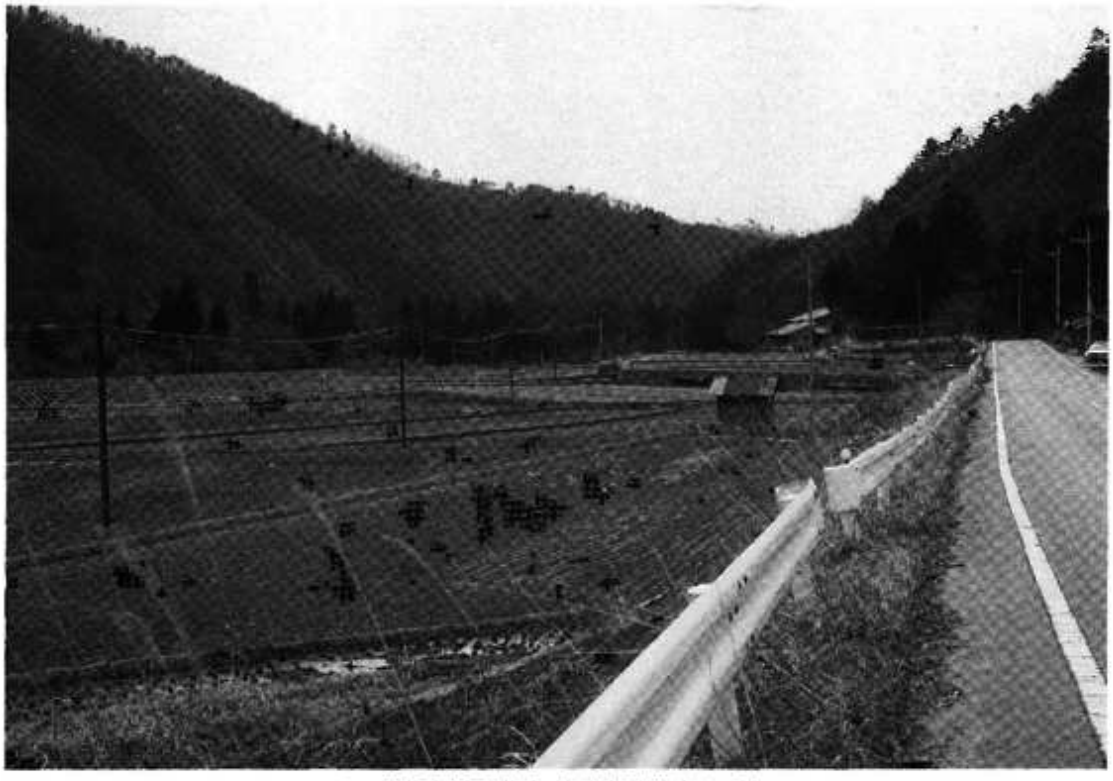
2．ダヤ前遺跡出土物

図版 6

1．フケ上地点遠望(南西から)

2．東　壁(南から)

1．完掘状況（南から）



2．半兵衛屋敷地点遠望（北東から）

図版 8

1．西　壁(南から)

2．完掘状況(北から)

平成６年３月10日　印刷
平成６年３月30日　発行

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅵ

発行　匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町イ1260

印刷　有限会社　谷口印刷
島根県松江市母衣町89